

## 木を植えるということ…②

テラス前の桑の木やくろがねもち、ねむの木の葉っぱが生い茂り、涼しい木陰をつくっています。色水やぬたくり、泡遊びなど夏ならではの遊びが始まり、園舎前のこの木陰のコーナーは、子ども達のオアシスです。

さて、谷頭こども園の南東のブロック堀沿いに、大きな銀杏の木があります。比較的大きな木々の中で、この銀杏の木は、別格の堂々とした佇まいを感じます。まさに、**谷頭こども園のシンボルツリー**です。樹齢何年でしょうか？高さは電柱を優に越しており、幹回りは2m。おそらく山田町立保育所創立時から植えてある木ではないでしょうか？運営が社協にかわり15年目。合わせて1257名の卒園児を送り出しています。春の園庭、お母さんと離れがたくて涙した子ども。夏、木の枝にとまるカミキリムシやカナブンを追いかけた男の子。秋、散った銀杏の葉っぱで遊ぶ女の子。冬、木の下で日向ぼっこをした子どもたち。四季折々の何千もの子どもたちの遊ぶ姿をただ、何も言わずに見てきたのでしょね…。

前回、子どもは木とともに成長すると書きました。この園を卒園された保護者の方が、銀杏の木があったと懐かしそうに話してくださったそうです。園の木は、子どもたちの故郷になります。この銀杏の木が、**これからも続く谷頭こども園の歴史のレジェンドとして見守ってくれること**でしょう。

なお、銀杏の幹を中心にした**ツリーハウスの構想**を練っています。地上から2m。ツリーハウスからの眺めはまるで天下をとったかの如く、配下に見える景色を楽しむのでしょうか。そんな子どもたちを想像するだけで、ワクワクします。

## 裸足のすすめ…一生の足の基礎は6歳で決まる

社協3園は、子どもたちに裸足で遊ぶことを推奨しています。**メディアやゲームに傾倒**し外で遊ぶ機会が減っている現状。靴下や底の厚い靴を履くなどの生活様式の変化。また、便利グッズを利用するあまり、赤ちゃんのすりバイやハイハイ、高バイなど。通常の**発達段階を踏まず歩き出す乳児が増えている**ことも指摘されています。

上記のような問題が、O脚やX脚、浮足、外反母趾、体幹が育ちにくいなどの子どもたちの足の育ちにかなばしくない影響を私たちは見てきました。

また、直接地面を踏みしめることが、足の裏に刺激を与え、脳が反応することも教育的意義が高いことも分かっています。足の裏から感じ取る、「サラサラ」「スベスベ」「ドロドロ」「冷たさや温かさ」などの**①触覚**。地面の凸凹や傾斜、滑りやすさをとらえバランスをとろうとする**②前庭感覚**。足などの動きや位置、力の入れ具合を感じ身体全体のイメージや器用さの獲得に繋がる**③固有受容覚**。この3つの感覚は、裸足で遊ぶことで研ぎ澄まされ脳が刺激を受け、**脳の形成にも多大な良い影響を受けることが**、脳科学や療育的支援からも言われていることです。

そして、裸足で遊ぶ意義の最後は、「**免疫力**」です。これは、過度に清潔志向が高まっている、コロナ禍の今だからこそとても大事。裸足で土の上を歩き、土中の常在菌に触れることで、自然に免疫力が高まります。そして何よりも嫌悪感無く、土や泥んこに触れて欲しいと思います。昨今の家庭の庭は、砂利がまかれ、コンクリートで覆られているところがほとんどです。園の庭は子ども達が裸足で歩ける、最後の砦ではないでしょうか？

\*庭での裸足は強制するものではありません。「みんなの足や身体が強くなるから裸足が良いよ!」、「裸足は気持ちが良いよ!」と誘いかけられています。また、発達の特徴から土に足をつけることが苦手な子ども達もいます。個々に合わせて配慮しています。

## 私ごとですが…

今月の始め、コロナ感染拡大で延期された高校総体が終わりました。娘にとって最後の大会です。中、高と木花や生目の運動公園を何十回も往復しました。悔し泣きしたことや友達とのいざこざ。時には好きなアイドルの歌に合わせて一緒に歌った帰り道。思春期になると親子の会話は減り、思いの行き違いも少なくありません。部活動を通して娘との時間や思いを共有できたことは、今考えるとかけがえのないものでした。人生の中で親と子が一緒に過ごせるのは、本当に僅かな時間だなと思います。大会の最終日、しみじみと思い返しなが、娘が巣立って行く日が近づいていることを意識せずにはおられませんでした。